

一般質問の内容

- 1．災害対策について
 - 災害対策の選択と集中
 - 土砂災害ハザードマップ
 - 東日本大震災への支援と災害ボランティアの派遣
- 2．教育問題について
 - ファミコンと携帯電話が学力に与える影響
 - 高等学校の校則
 - 水産、農業関係高等学校の進路
- 3．若者の交流人口拡大と定住策について
- 4．視覚障害者に配慮した交通安全施設の整備について

自由民主党・新生会の岡村精二です。

3月11日に発生した東日本大震災で犠牲になられた皆さまのご冥福と、被災された皆さまに心からお見舞いを申し上げます。私も長年、災害対策に取り組んで参りましたが、今回の震災ほど「想定外」という言葉が当てはまる事例はなく、多くの地震学者が、ショックを受けたに違いありません。遅々として進まない災害復旧に、多くの国民が苛立ちを見せていますが、世界有数の災害多発国に住む日本人の宿命なのかもしれません。

参考資料の左上の写真をご覧ください。昭和21年の南海地震直後の高知市内の様子と、現在の高知市内の様子です。高知市は昭和21年の南海地震による津波で、壊滅的な被害を受けました。しかし、ほとんどの住民はその地を離れず、災害復興に取り組んだ成果として、現在の立派な高知市に立ち直りました。人間の持つ帰巣本能が生み出す大きなエネルギーの集積だと思えてなりません。

人間は強い郷土愛と、たくましい精神と勇気を持っています。東日本大震災により甚大な被害を受けた地域も、必ず立ち直り、素晴らしい復興を遂げると信じています。

さて、私の事務所の玄関には、国旗を掲げるためのポールが取り付けられています。その先端に「金色の玉」が付いていますが、5年前の4月、その「金の玉」の上に、ツバメが、突然、巣づくりを始めました。プラスチック製のポールはツバメがとまるたびに、大きくたわみ、ツバメが飛び立ったあとも揺れが止まらないので、木と針金を使って補強しました。

つがいのツバメが飛び交い、数日で、すり鉢状の立派な巣を作り上げました。産卵を終え、2羽のツバメが交代で卵を温めている姿は微笑ましいものでした。

ところが、ちょっとしたスキに、カラスに襲われ、立派なすり鉢状の巣は無残にも壊され、土間には割れた卵が2個落ちていました。

近くの電線の上で、壊れた巣をじっと見つめるツバメがかわいそうになり、「金の玉」の上に、お椀をボンドで固定し、壊れた巣の土を載せてみたところ、2日後、そのお椀の上に巣づくりを始めました。

再び産卵し、交代で卵を温めていましたが、再び、カラスに襲われてしまいました。

巣の周りを恨めしそうに飛び交うツバメを見てくやしさが、こみ上げてきました。今度は絶対に壊されないように、大きな井をお椀の上に乗せてみました。すると数日後、ツバメは再び、その井の上に巣づくりを始めたのです。

決してあきらめないツバメの夫婦に感動しました。しかし、その年は、再び産卵することはありませんでした。

その後も、毎年のようにツバメが巣作りをし、やっと雛が生まれた頃になると、カラスや蛇に襲われ、巣立ちを迎えることができずでした。そして、去年はついに、1羽のツバメも戻ることなく、夏を迎え、ついに我が家での巣づくりをあきらめたものと思っていました。

ところが、今年6月、再びツバメが戻って、井の上に巣づくりを始め、5羽の雛が

誕生しました。順調に生育し「今度こそ」と、事務所を挙げて応援していましたが、7月10日、事務所の職員が巣の上に蛇を見つけました。胴体に3箇所、大きなくびれがあるのを見て、3羽食べられたと直感したそうです。

それにもめげず、残った2羽の巣立ちのために、必死にエサを運び続けるツバメの姿に感動しました。7月15日、ついに2羽の雛が旅立って行きました。

6年越しの初めての巣立ちに、ツバメから大きな感動と勇気を頂きました。「七転び八起き」といいますが、日本人の歴史そのものなのかもしれません。東日本の復興を願わずにはおれません。微力ながら今後も出来る限りの支援をして参りたいと思っています。

それでは通告に従い、一般質問をさせていただきます。

まず、災害対策について3点、

初めに災害対策の選択と集中についてお尋ねいたします。

皆さまの手許に中央防災会議が作成した「発生が逼迫しているとされる地震と被害予測」と書かれた資料を配布させて頂きました。今回の東日本大震災は、中央防災会議の予測をはるかに超える甚大な被害を及ぼし、地震予知の難しさを感じさせます。中央防災会議の予測は、西日本にも大きな不安を与えるデータを示しており、特に気になるのは、東南海地震と南海地震が同時に発生した場合の被害を、死者18,000人、全壊家屋36万棟、経済被害57兆円と予測していることです。

津波については、山口県の場合、豊後水道が自然の防波堤となって侵入を防いでくれるため、巨大な津波も山口県に到達するときには、2メートル程度と予測されています。

地震については、山口県には菊川断層と岩国断層帯がありますが、比較的安全場所です。山口市内に衛星用のパラボラアンテナが設置してあるのは、地盤が安定していて、静止衛星を捕らえやすいからであり、特に秋吉台は、3億年前に海底が隆起し、数千万年のときを経て、美しい鍾乳洞である秋芳洞を作り上げましたということは、数千万年もの間、巨大な地震がなかったということです。

さて、小中学校施設の耐震化率は、昨年度、全国最下位ということもあり、数年前から耐震化工事が急ピッチで進められ、県立学校については今年度中に、90%に達するとのことですが、小中学校については、市町によって格差があるようです。また、私立学校では経営環境が厳しいこともあり、耐震化工事が困難な状況との話を伺っています。

耐震化工事について、「選択と集中」という視点から考えると、山口県の場合、菊川断層と岩国断層帯に沿った地域を優先的に行うべきであり、その地域の市町、私立学校への支援が必要と考えますが、県のご所見をお伺いいたします。

また、私は、山口県の学校耐震化率、昨年度、最下位という結果は、受け止め方を変えれば、いかに山口県が地震に対して安全な場所であったかという証でもあると思います。

地震に対する備えはもちろん大切ですが、耐震化以上に、平成11年の18号台風による高潮災害や一昨年、昨年と続いた豪雨災害の経験から、海岸線の護岸整備、河川の改修、揚水ポンプ場の新設や増設などの整備状況に「あせり」を感じている住民が多くいます。

災害対策にも「選択と集中」という考え方が必要と思われませんが、ご所見をお伺いいたします。

次に、土砂災害ハザードマップについてお尋ねいたします。

災害時における総合的かつ円滑な警戒避難を確保するため、高潮、洪水とあわせて、土砂災害ハザードマップが作成され、住民への周知が図られています。

土砂災害ハザードマップとは、土砂災害警戒区域及び土砂災害特別警戒区域、並びにこれらの区域における土砂災害の発生原因となる自然現象である急傾斜地の崩壊、土石流、地滑りを表示した図面などを記載したものです。

仮に自分の住んでいる家屋が「警戒区域」に含まれた場合、高潮や洪水のハザードマップについては地形的な統一性があり、住民の理解を得やすいと思います。しかしながら、土砂災害ハザードマップについては、該当する警戒区域の民家が、1軒だけの場合もあり「なぜ、我が家だけが」などといった声が多く寄せられています。

宅地造成された土地を購入した住民からは「開発申請を行い、県の許可を得て、工事が行われているのに、なぜ警戒区域に指定されるのか理解できない」との声や、中山間地域の住民からは「土地、建物を売却して、中心市街地に転居する予定だったが、指定されれば、家は売れなくなってしまう」との苦情もあります。

ハザードマップの目的と必要性については理解していますが、特に土砂災害ハザードマップについては、住民理解と、その周知についての配慮が必要と思われませんが、その取り組みとご所見をお伺いいたします。

次に、東日本大震災への支援と災害ボランティアの派遣についてお尋ねします。

宮城県や岩手県内の被災地を視察すると、災害復旧における地域格差が非常に大きく、宮城県石巻市や女川市では、マスコミの報道が集中したことや、交通の利便性の良さもあり、震災直後から災害ボランティアが殺到し、現在では市街地における瓦礫の撤去はほとんど終わり、沿岸部は、すでに更地になっています。

ボランティア団体の活動内容も、復旧支援から産業復興支援へと変わりつつあります。しかし、交通の利便性が悪く、マスコミにも報道されることない地域では、瓦礫が今も手付かずの状況のまま放置され、今後も多くの災害ボランティアを必要としています。

私が支援している災害ボランティア団体は、現在、宮城県大崎市を拠点とし、石巻市を中心に活動して参りましたが、9月末で拠点を閉鎖し、岩手県内に移転する予定です。

宇部市は福島県いわき市を中心に支援活動を継続していますが、いわき市を重点的

に支援するきっかけは、今年1月に、いわき市から宇部市への視察があり、交流が始まったこと、また、かつて宇部市と同じく炭鉱で栄えた街であることなどだそうです。特別に、県や他の市町との協議した上で決定されたことではありません。偶然の結果として「いわき市」になったようです。

山口県は、福島県郡山市にあるビックパレットでの支援活動を行っていますが、広域連携の結果、ビックパレットになったのか、その経緯についてお伺いします。

各県、各市町が、姉妹都市などの交流実績などで、勝手に支援活動を行っている状況では、災害支援の地域格差を是正することは困難な状況だと思われ、広域連携の必要性を強く感じます。

東日本大震災における県内の市町との災害支援における連携、また今後の支援活動を含め、全国知事会等における災害時の連携が特に大切だと思われませんが、ご所見をお伺いいたします。

また、山口県の支援地域とその規模、災害ボランティアの派遣の状況についてお伺いいたします。

次に教育問題について3点、

まず、ファミコン、今はゲーム機器という方が正確かも知れませんが、ゲーム機器と携帯電話が学力に与える影響についてお尋ねいたします。

明治維新において、山口県が日本のリーダー的役割を果たし、多くの有能な政治家や総理総裁を輩出したのは、単なる偶然ではなく、山口県の教育レベルの高さが、その大きな要因であったと思われまます。

その役割を担ったのは、松下村塾をはじめとする多くの寺子屋の存在であり、身分の上下に関わらず、学問を受ける機会が与えられたことです。そのことが教育水準の高さと底辺を広げ、久坂玄瑞、高杉晋作、伊藤博文といった素晴らしい人材を輩出させ、山口県は明治維新を推進する中心的な存在となりました。

しかし、近年の山口県における子どもたちの学力の低迷には、失望せざるを得ません。

私は27年間、青少年教育に携わって参りましたが、ここ数年、子どもたちの変化に戸惑いを感じています。不登校、引きこもり、特に対人関係をうまく作ることができず、他人との関わりを拒絶する子どもが増えています。

20人くらいの子どもたちを1つの部屋に集めると、かつては、すぐに仲間づくりができ、騒々しくなってしまう状況でしたが、最近は誰一人騒がず、静かに壁にもたれて、各々が勝手に携帯ゲーム機で遊んでいます。

テレビの影響を危惧する声も多くありますが、それ以上に家庭用ゲーム機や、インターネット、携帯電話が、対人関係を構築する訓練を行わなければならない大切な時期に、大きな影響を与えているように思えてなりません。先日、新幹線で名古屋まで行く機会がありましたが、隣に座っていた親子は、それぞれが手にした携帯ゲーム機に夢中で、約3時間、一言も話さないままでした。

かつてファミコンがゲーム機の主流だった頃「いくら注意をしても、ゲームをやめないから預かってほしい」とミカン箱一杯のファミコンとゲームソフトを持って来られた親子がいました。私は箱を抱えて、家の前にある小川に、すべてを捨てました。まさか、私が川に捨ててしまうと思っていたいなかったお母さんは啞然とし、子どもは大泣きでした。親子が帰ったあと、こっそり川に入って、ファミコンとゲームソフトを拾い上げ、きれいに洗って、半月乾かした後、電源を入れると、問題なく作動しました。

予断な話でしたが、いずれにしろ、子どもを取り巻く社会的環境、家庭内の生活環境が、子どもたちの学力にも大きな影響を与えています。子どもたちはテレビやゲーム、インターネット、携帯電話に忙しく、勉強する暇がないということが、学力低下の最大の理由ではないでしょうか。

最近、ゲームに忙しくて、テレビを見る暇のない子どもたちが増え、子どものテレビ離れも起こっているようです。

山口県の子どもたちの学力向上に対する教育委員会の努力は理解していますが、特にファミコンと携帯電話が与える影響力は強大です。

私は、子どもたちの学力を向上させる、もっとも手っ取り早い方法は、ゲーム機器と携帯電話、できればテレビも取り上げてしまうことだと思っています。

教育委員会として、ゲーム機器と携帯電話を排除させるキャンペーンを行っては、いかがでしょうか。石川県が制定した小中学生の携帯電話所持禁止条例は、罰則規定こそありませんが、制定したという精神的効果は大きいと考えられます。学力はもちろんです、人間としての成長に大きな影響を与えていることに不安を感じます。

ゲーム機器と携帯電話が、子どもの成長や学力に与える影響と対策について、ご所見をお伺いいたします。

次に高等学校の校則についてお尋ねいたします。

高校の校則には、髪を染めることを禁止する染髪禁止やアルバイト禁止などが記載され、子どもと親は高校入学時に、その規則に従う誓約書を学校に提出しています。にもかかわらず、その規則に従わない生徒がおり、それを黙認している学校があるのは如何なものでしょうか。

ある高等学校のPTA役員会で「校則に染髪禁止と書いてあるのに、茶髪の子どもの多いのは、なぜですか」と校長に質問すると「茶髪でも成績のいい子はいますから」と答えられて「失望した」と漏らしていた友人がいます。

守らせない校則なら、ない方がいい。ものわかりにいい大人になってはいけないと最近、感じています。

校則に染髪禁止を記載している学校の割合と、校則に対するご所見をお伺いします。

県内には、携帯電話の高等学校への持ち込みについて、原則禁止としていない学校が61校あり、それに対して、一定の理由・事情に限って、家庭からの申請により学校へ持ち込む場合を除き原則禁止としている学校が14校あります。

携帯電話の持ち込みについて、例外を認めていない学校が2校あります。あえて、学校名を挙げますと、宇部商業高校、宇部工業高校です。校長はもちろん、直接指導する教員の結束力と強い信念に感動します。

携帯電話によるインターネットや写真による被害も多発しているだけに、私は「例外を認めるべきではない」との立場で生徒に対応すべき課題だと考えますが、携帯電話の取り扱いについて教育委員会としてのご所見をお伺いいたします。

次に水産、農業関係高等学校の進路についてお尋ねいたします。

農業関係高等学校の平成21年度卒業生は388名、その内、農業関連分野への就職者は84名、また農業関係進学者は89名で合計173名です。残りの215名、約56%は農業関連分野以外に就職や進学したことになります。

また、水産高校の平成21年度の卒業生は47名、その内、水産関連分野への就職者は21名、また水産関係進学者は12名で合計33名です。残りの14名、約30%は水産関連分野以外に就職や進学したことになります。

さて、県立高等学校における生徒一人当たりにかかる経費は、普通科高校の生徒は年間約68万円、農業関係高校の生徒は122万円、水産高校の生徒は380万円です。農業関係高校の生徒は、普通科高校の生徒の約1.8倍、水産高校の生徒は5.6倍の経費が掛かっています。

にもかかわらず、その専門分野への就職や進学は少なく、山口県の第1次産業の将来に大きな不安を感じます。

多額の費用を掛け、情熱を込めて教育した生徒を、その専門性を活かした進路に就職や進学させることのできない悔しさを、教員の皆さんが、もっとも強く感じておられるのではないのでしょうか。

山口県には水産大学校があり、平成21年度は水産高校から1名が進学しています。山口大学には農学部もあります。教員のモチベーションと、子どもたちに夢と希望を与え、専門分野への向学心を高めるためには、国公立大学や私立大学への推薦入学枠の確保も必要だと思われます。大学や大学校への進学と、就職を含めた進路対策をお伺いいたします。

次に、若者の交流人口拡大と定住策についてお尋ねいたします。

私は若い頃から旅行が好きで、国内の観光地は、ほとんど見て回りましたが、全国的にも山口県ほど、観光資源に恵まれた県はありません。

しかし、観光客、特に福岡空港に来日した外国人の多くが、阿蘇や長崎方面に行ってしまう状況は、残念でなりません。

若者たちについてはどうでしょうか。私たちの世代には、萩の歴史文化、秋芳洞や山陰沿岸の素晴らしい自然美、そして、何より温泉は魅力的ですが、残念ながら、若者たちには、あまり、おしゃれな場所と受け止められていないようです。

先日、20代の若者たちと山口県の課題について語り合う機会がありました。

「山口県には休日に、買い物に行きたいと思わせるお店や、私たち世代を引きつける魅力的な店がなかなか見つかりません。」

ある男の子は「僕は帽子一つ買うために、わざわざ、福岡市内まで行きます。県がリードをとって、有名専門店が連なる巨大アウトレットはできませんか。唯一可能性のある場所は、県内なら新山口駅の南側ですね。」

また、ある音楽好きな男の子は「コンサートやミュージカルを見るためには、2時間掛けて、福岡や広島まで行きます。県内では、有名な歌手のコンサートを見る機会はありませんからね。大きなアリーナがあればいいのに」と多くの課題とアドバイスを頂きました。

今、山口県内で、もっともショウビジネスで使用されているホールは、周南市文化会館だと思います。宇部市には渡辺翁記念会館があり、かつては、この会館で歌うことが一流歌手のステータスだったそうですが、今では有名な歌手が舞台に立つ機会はほとんどありません。

周南市文化会館でミュージカルやコンサートが行われている理由は、大型トレーラーが数台入る駐車場が舞台裏にあるからです。渡辺翁記念会館は大型トラックの入る駐車場がありません。しかし、その周南市文化会館の収容定員は1800名しかなく、有名な歌手やミュージカルを招くには定員不足です。

そこで、県内で唯一可能性がある施設はと考えると、山口きらら博記念公園の「多目的ドーム」以外にはありません。スポーツイベントのための施設ですが、グラウンド部分まで入れれば、1万人以上を収容できる施設です。

かつて私の友人が、「エグザイル」のコンサートを、多目的ドームで開催しようと企画したことがあります。関係者が下見のために、多目的ドームを訪れましたが、中に入った瞬間に「ここは音響的に無理です」と断られてしまったとのこと。

東京ドームも音響的には問題があるそうですが、6万人近く収容できる会場というメリットから使用されているとのこと。

仮に「多目的ドーム」でエグザイルのコンサートがあるとすれば、1分でチケットは完売されるだろうとのこと。

新たに1万人収容可能なアリーナをつくれば、駐車場も含め巨費を投じなければなりません。仮に、多目的ドームをコンサートにも使えるように音響対策を行えば、1万人収容できるホールとして、エグザイルやAKB、スマップを招くことができ、若者の交流人口が増加するのではないのでしょうか。5000台以上入れる駐車場を持ち、交通網もしっかりしています。「山口きらら博」では、山本寛斎プロデュースのパフォーマンスイベント「やまぐち元気伝説」が行われた実績もあります。

また、広い駐車場を活用した屋外映画館も可能です。音声はFMラジオで流せば、特別な設備も必要ありません。

若者たちを呼び込める施設としての山口きらら博記念公園「多目的ドーム」の活用についてお伺いいたします。

また、他県から若者を呼び込み若者の交流人口を拡大させることは、経済効果を生

み、さらに若者の定住策に繋がると考えますが、県の若者の交流人口の拡大と、若者の定住策に対する取り組みについて、ご所見をお伺いいたします。

最後に、視覚障害者に配慮した交通安全施設の整備についてお尋ねいたします。

視覚障害者の大きなバリアーの一つに外出時の移動があります。外出するにしても、道路の歩行や横断は避けて通れませんが、近年、自動車のハイブリッド化、また交差点で停止するとエンジンが自動的に止まるシステムが導入された自動車が普及するなどし、聴覚に頼って移動している視覚障害者にとっては、静かさが大きな脅威となっています。

そこで、“ピヨピヨ”“カッコー”と音で横断歩道を渡るタイミングと方向を知らせる音響信号機、および横断歩道内のエスコートゾーン設置は、視覚障害者にとって安心・安全な移動を確保するためにも、重要な課題となっています。今後の取り組みについてお伺いいたします。

以上で一般質問を終わります。ご静聴ありがとうございました。